

**A Japanese translation of Jeon Sung-Hyun's academic paper:
Between Colonizer and Colonized;
Trends and Issues of Studies on Japanese Settlers in Colonial Korea (2)**

SHIMAMOTO Masanori

Following to my contribution to the last number of this bulletin, I continue to translate Jeon Sung-Hyun's academic paper: Between Colonizer and Colonized; Trends and Issues of Studies on Japanese Settlers in Colonial Korea.

This academic paper describes the issue of the Japanese people lived in colonial Korea. In this paper, issues of them are summarized briefly. These are the roles of Japanese people especially in the colonial rule and policies around the politics of colony, generation between first and second, and hierarchical structure of the Japanese in colonial Korea etc.

Through this paper in Japanese language, I hope to contribute to previous discussions of relationship between Japan and Korea. In addition, this research offers a lot of implications about how to set relations with others to complete a post-colonial task.

全盛賢 (チョン・ソンヒョン)

「식민자와 식민지민 사이, ‘재조일본인’ 연구의 동향과 쟁점」 翻訳 (2)

島本昌典 SHIMAMOTO Masanori

前号に引き続き、全盛賢 (チョン・ソンヒョン) による在朝日本人に関する論文「植民者と植民地民のあいだ－「在朝日本人」研究の動向と争点 (식민자와 식민지민 사이 ‘재조일본인’ 연구의 동향과 쟁점)」の翻訳を投稿させていただく。前号に投稿した翻訳文に先立つ紹介文の中で、朝鮮の開港期から植民地期にかけて朝鮮半島に暮らした在朝日本人に関する研究が、近年様々な分野で掘りかきを進めており、またこの人々の影響が今日の朝鮮半島においてもいまだ色濃く残っていることを指摘した。この論文は、そのような在朝日本人に関する研究の必要性やアプローチ方法、主要な争点についてまとめられたものである。特に今号に掲載する論文の後半部は、在朝日本人に関する様々な分野の先行研究や、今後研究がさらに必要とされる点についてもまとめられており、在朝日本人に関して学ぶ上で道標となってくれる内容である。

翻訳を快諾いただき、その翻訳の中での質問にも親切にご対応いただいた全盛賢氏に厚く感謝したい。

植民者と植民地民のあいだ

一 「在朝日本人」研究の動向と争点 (2)

第3章 在朝日本人研究の動向と争点

前章まで見てきた朝鮮に居住した日本人たちの存在形態とその特徴を念頭に置き、これまでに展開された在朝日本人に関する研究を争点化し、その動向と内容、そして課題等を確認してみることにしよう。先行研究では、これまでの研究成果を個別に整理しているだけでなく、すでに在朝日本人に関する研究成果と課題を、全体的に整理した論文も発表されている¹。この章では、あえてそれらの研究成果を重複して羅列はしない。ただしこれまでの研究成果を土台に、その中から争点となりうる事項を取り出し

て簡潔に整理する一方、先行研究では扱われなかった部分についても記述していくこととする。

植民地に居住した日本人または日本人社会についての研究は、まず自国史の観点から日本で始まった。1945年の敗戦によって植民地に居住した日本人たちの本国引き揚げと定着の過程で、植民地に対する経験と記憶はタブーとされ、引き揚げ過程の経験と植民支配の過去が主にノスタルジックに記録されてきたように、植民地支配とそこに居住した日本人たちの現実、被害者意識と過去の感傷化を通して忘却の世界に消えていくかのようなようであった²。しかし在朝日本人の苦難を目撃し、その中で植民地朝鮮を記憶していこうとする植民2世の日本人作家たちは、植民地を忘却し感傷化する雰囲気警鐘を鳴らし、植民支配の歴史と植民支配者としての植民地居住日本人の侵略的位相を明瞭にあぶりだす一方で、それを通して過去の植民地時代への反省を呼び起こした³。日本の学術界における在朝日本人研究もこのような少数の流れの中で進められた。

日本での研究は、帝国主義論に基づいて⁴日本の帝国主義を批判し、日帝の朝鮮侵略と在朝日本人の侵略史的な意味を強調することから始まった。その嚆矢としては、研究書ではないが植民3世として自らの父と祖父、そして叔父を朝鮮の「植民者」と名づけ、それまで一般民衆は何も知らない善良な被害者であり「支配者」ではないと考えていた日本人の意識構造を批判した村松武司であった⁵。それに続いて、植民地の日本人に対する研究の空白を指摘し、公式に研究主題として捉えたのが梶村秀樹であった。梶村は開港後朝鮮に渡ってきた全階層の日本人たちが、役人たち以上に侵略的な姿をした強烈な国家主義者であり、冷酷なエゴイストであり、露骨な偏見と差別・加害の実行者であったと批判した⁶。梶村の研究はその後忘れ去られたかのようなようであった

が、依然として反省なき日本と植民支配の実態を知らない戦後世代に警鐘を鳴らし「祖父母や親たちの体験を客観的に見つめることで過ちを二度と繰り返さないための担保を獲得」せんとする願いから、高崎宗司の研究へと継承された⁷。高崎のこの研究は、植民地朝鮮の支配は名もなき人々の「草の根の侵略」「草の根の植民地支配」であったと強調し、在朝日本人を「草の根」植民者と規定し、朝鮮における日本人史の全体像を描いたのである。

もちろんこの研究のように、朝鮮に居住したすべての日本人たちを侵略的な「草の根」の植民者として単純にイメージ化することはできない。歴史像を単純化しては、渡航時期別、居住地域別、階級・階層別、ジェンダー別、世代別、個人別といった多種多様な人々の違いと生き様のありようについて、具体的かつ立体的に観察することができなくなってしまう。それだけでなく、植民者であると同時に植民地民であるこの人々の二重的な姿はもちろん、植民者として関与した植民支配と植民政策の複数性と可変性など、植民支配のありのままに立体的な姿も描き出すことができなくなってしまう⁸。しかし高崎のこの研究は、以後の研究者たちに在朝日本人研究の重要性に気付かせただけでなく、「日帝」と通称されてきた抽象的な植民支配者を、分野別、地域別、性差、世代別、またどのような価値観や性格を持った人であるのかという現実的な植民支配者として、在朝日本人を把握することに大きな進展をもたらした。すなわち、植民支配と植民者の実像を深厚に確認することができるようになったのである。そして植民地と植民支配の姿を、地域と日常にまで拡張することができる道を開いた。このような意味からも、この研究は継承する価値が充分にあるといえる。

一方、日本の学術界では1990年以後、既存の帝国主義論に基盤を置く植民地研究を批判し、脱植民主義の影響のもと「複数の植民地・占領地と日本国内の構造的関連を明らかにする」という「帝国史研究⁹」に立脚した在朝日本人に関する研究成果が出始めた。断定的に規定することはできないが、帝国主義批判よりは日本人の人口移動と移民社会に焦点をあてた研究として、木村健二の研究が代表的である¹⁰。この研究では主に日本史の観点から、海外移民の原因を明治維新以後の日本の資本主義の発達過程と移住者たちの社会経済的背景の分析を通して明らかにする一方、初期の朝鮮移住日本人たちが「日本人だけの社会」を、どのようにつくっていったのかという点に重点を置いて考察している。

続いて本格的な帝国史的観点から、移民史を考察した研究が発表された¹¹。この研究は、帝国史的観点から日本人の移民を過去に帝国の領土下にあった全地域の移住と移民を総合的に明らかにするなど、比較史的に考察した点には意味があるが、結局日本からの拡張過程であり帝国日本の姿を明らかにする過程であるため、植民地の立場に基盤を置かなかった。それだけでなく、内地の植民地と外地の植民地間の違いはもちろん、外地の植民地間の違いが帝国の形態と同一の範疇で議論されることで、意識的であれ無意識的であれ、植民地の日本人と日本人社会の侵略性を看過することになりかねないといえよう。

これらの研究成果は、その後の在朝日本人研究に直接の影響を与えた。20世紀後半から本格的な研究成果が積み重なりはじめ、21世紀前半の現在、韓国と日本はもちろん、アメリカでも関連の研究成果が蓄積している。その研究分野も多様に分布しているといえるが、政治史はもちろん、社会史、経済史、文化史、女性史、教育史、言論史、地域史、都市史等、あらゆる分野に万遍なく研究領域を拡げている。ここではすでに言及したように、主に21世紀に入って研究されたものの中から議論的となることを土台に、その内容を検討しそれに対する筆者の見解を述べていくこととする。

1. 植民地政治をめぐる問題

この問題に対する最も体系的で多くの研究成果は、植民地政治史、特にいわゆる植民支配権力と植民支配政策という「中央政治」の領域で蓄積されている。これらの研究は、韓国、日本、アメリカでそれぞれ博士論文と単行本の形で刊行されたが、特に植民権力の範疇を在朝日本人と朝鮮人上層部まで拡張し、植民政策にこれらの人々が積極的に関与したという植民権力の複数性と植民政策の可変性を明らかにした点において意味がある。チョン・ソンヒョンは、1910年代から1920年代までの朝鮮商業会議所連合会について、この連合会が地域と「朝鮮本位」を基礎とする植民政策の樹立を要求する政治運動の展開によって、植民地産業政策の樹立に関与したことを具体的に明らかにした¹²。キ・ユジョンは、チョン・ソンヒョンの研究を継いで、1930年代までの「地方自治」団体と経済団体など、在朝日本人が展開した経済運動が朝鮮意識の形成と「朝鮮主義」という政治理念と論理を通して、植民政策にどのような影響を及ぼしたのかを研究した¹³。この研究は主に本

国政府、朝鮮総督府、在朝日本人の関係を考察したものである。

一方、内田じゅんは開港から植民地期全期を通史的に扱いながら、在朝日本人商工業者たちを中心に「帝国の利益を追い求める者」としての「ブローカー」的な性格を通して、朝鮮総督府との緊張関係はもちろん、朝鮮人上層部と協力しながら自分たちの利益のための政治活動を展開した点を明らかにした¹⁴。イ・スンヨプの研究は、内田が注目した朝鮮総督府－在朝日本人－朝鮮人の関係に注目しつつ、先の3人の研究者が主に経済政策に集中した点とは違い、自治権の擁護運動や3・1独立運動への対応、参政権問題、司法改革問題など、主に政治的な問題を扱いながら、朝鮮総督府と在朝日本人、そして朝鮮人との間における対立と権力関係を探ったものである¹⁵。

しかしこれらの研究の中で、チョン・ソンヒョン、内田、キ・ユジョンの研究は、植民権力の行方について植民地朝鮮内に限定してみたとき、在朝日本人と朝鮮人上層部までが関与したものとしてみている。特に在朝日本人の場合、自分たちの利害を貫徹させるために、経済団体と「地方自治」団体などを通して本国または朝鮮総督府と対立する一方で協力も行い、反対にその過程で利益が侵害される場合は朝鮮人たちとの間で葛藤や不和も生じ、利益が合致する場合は協調や協力も行われるなど、「自律的」な政治勢力であったことが明らかにされた。

その反面イ・スンヨプは、自身の研究で分析した在朝日本人たちの展開した政治運動のほとんどが失敗したという事実に基づき、「少なくとも植民地中央政治の水準でみるかぎり、在朝日本人は一度も政治の主人公になったことはない。在朝日本人に対する最近の流行の背景にある過度な期待と過大評価には、違和感を覚えざるを得ない」と主張した¹⁶。これを根拠に在朝日本人の研究成果を整理したイ・ヒョンシクも「在朝日本人が植民地支配ブロックの一員として一定の自律性を持っていたことは事実だが、植民権力の立場からみると、在朝日本人はどこまでも統治の対象であり、ときには朝鮮統治（朝鮮民心）安定のためには統制せねばならない「気まずい存在」に過ぎなかったと強調している¹⁷。

もちろん在朝日本人の植民権力者としての位相を、誇張したり飾り立てたりする必要はない。さらに植民支配者の姿も多様であった。朝鮮総督府、朝鮮軍、在朝日本人、議会、内閣、軍部、元老、天皇など、諸々の政治勢力がここにすべて含まれるので

ある。それほど、植民支配は複雑な姿をもって体现された。その上、統治は常に権力と「共に」行われた。植民統治のための植民政策は、概ね朝鮮総督府を通して、またはその下位機構を通して出されるしかない。これまでは、このことを通称して一つの植民権力で把握してきたのである。そのため、植民支配、植民権力、植民政策の複雑で多様な正体をまともに把握することができなかつたといえるだろう。そうであるならば、朝鮮総督府を頂点とする権力機構から植民統治政策が出てくるといえて、その政策に介入する多様な層位を分析してこそ、植民支配と植民統治の実像をある程度確認することができるはずである。その点で、イ・ヒョンシクが根拠にしているイ・スンヨプの研究は、在朝日本人が介入した植民支配と植民政策での自律性を論ずることが難しい部分に局限しているといえることができる。

イ・スンヨプは在朝日本人の動向を「全鮮内地人実業家懇話会」、「同民会」、「全鮮公職者大会」、「朝鮮弁護士会」などを通して考察した。これらそれぞれの団体は、いわゆる植民政策に「直接的に」関与できる法的・制度的な仕組みを持たない任意の団体であった。特に「全鮮内地人実業家懇話会」は3・1独立運動の後に、それに対する在朝日本人たちの反応と対応のため、臨時に招集された一時的な集まりに過ぎなかった。「全鮮公職者大会」も実際のところ、法的・制度的な仕組みを持った個別の道評議会、府協議会、商業会議所、学校組合、学校費所属会員の親善団体に過ぎない。よって、その大会成立の背景である京城府協議会が主導する、いわゆる「参政権」問題の世論をつくりだすためのものであるとしても、そのような世論は実際の圧力機関とは成り得ない沈黙機関の一つの意見でしかないのである。さらに全鮮公職者大会の一つの成果であると指摘される地方自治制度の改革は、すでに道評議会と府協議会において中央および地方当局に継続的に提起していたことであり、その成果は道評議会と府協議会という地方自治団体から出てきたことであるといえる¹⁸。

その反面、在朝日本人「地方自治」団体である商業会議所・商工会議所、府協議会・府会、道評議会・道会、学校組合は、植民政策に介入できる法的・制度的な仕組み、すなわち帝国議会が持っていた予算及び政策関連責任者の出席権と、それに対する質問権や建議権を¹⁹制限的な形態ではあったが有していた。さらに商業会議所は朝鮮全体の連合組織（朝鮮商業会議所連合会、朝鮮商工会議所）を結成し、定

期会議であれ臨時会議であれ、予算が審議される時期にあえて開かれ、毎回、政務総監あるいは経済関連部署長の出席を要求し、質問と建議を通して自分たちの主張を貫徹させようとした。それだけでなく、道（評議）会、部（協議）会、邑面（協議）会は地方官が議長として会議を進行し、関連予算の審議に諮問する程度であったが、該当執行部署長の出席と共に質問と建議が行われた。さらに、次の年の予算企画と編成に必要な建議案を提出するなど、地域政治と中央政治を行き来した²⁰。今後研究が進められねばならないが、学校組合も在朝日本人の有力者で構成され、会員を中心に教育予算の諮問を担う一方、教育分野の植民政策に深く介入していたことも把握することができる²¹。

そして、地域単位で在朝日本人の有力者たちが中心となった各種「市民大会」は、朝鮮人まで含めて邑面府及び道当局はもちろん、朝鮮総督府と日本本国にまで自分たちの利害関係に合致する政策の樹立を絶え間なく要求し、そのような要求は部分的に貫徹されもした²²。また一般経済団体の場合にも、植民政策に深く関与した。鉱務官僚と朝鮮の民間鉱業者で構成される朝鮮鉱業会の場合、1920年をはじめの戦後不況以後、鉱業保護政策の立案を要求したが、この要求はすぐに朝鮮総督府に受け入れられ、「鉱業に関する特別規定」として実施された²³。このように、在朝日本人の政治的な場での自律性が、もちろん植民政策を立案し執行する行政機関には及ばずとも、いつでも植民政策に介入できる水準であったことを、これらの研究成果を通して十分に確認することができる。

一方、道（評議）会、府（協議）会、邑面（協議）会など、地方自治団体を中心とする地方政治の場は、単純に地方にだけ限定される政治としてのみ把握することはできない。なぜなら、道府邑面など地方官庁の立場がさらに研究されなければならないが、地域単位で行われる各種政策も予算の問題などから朝鮮総督府の植民政策と繋がっていたからである。すなわちこれは、下からの政策的反映といえることができる。これと同じような状況は、すでに梶村から高崎へと続く研究で指摘したように「草の根」支配の典型として把握することができる。この点に関する研究は、ホン・スンクォンの卓越した研究があるが、京城と釜山などいくつかの地方の研究に限られている²⁴。他の地方の邑面（協議）会、府（協議）会、道（評議）会、商業会議所・商工会議所、学校組合、および各種「市民大会」などについての研究が蓄積

されれば、在朝日本人と朝鮮総督府および地方官庁、そして朝鮮人の間での政治、経済、社会、文化的関係を多彩にみることができ、植民地政治史も立体的に見通すことが可能となるはずだ。

2. 世代間区分の問題

次に、在朝日本人植民2世の研究のなかで共通して指摘されている、世代間区分についてみていくことにしよう。開港以後、植民統治期間が長くなるにつれて、はじめ50人ほどにすぎなかった在朝日本人の人口が、100万人にいたる大規模な居住集団となった。そのため、移住時期と居住地域という状況によって、「朝鮮認識」と「帝国意識」には当然違いがみられた。ひととき多様な違いのなかで、全体にわたって明確にその違いをみせる点が、世代間の区分であると考えられる。個人的な考えでは、まだ植民第1世代に対する総合的な研究がなされておらず、第1世代さえも「渡来者」と「新渡来者」を自ら区分しており、朝鮮で生まれた植民第2世代または朝鮮で育った植民第1.5世代のなかで、日帝末期に成人になった世代と敗戦後成人になった世代とに区分が可能であるにも関わらず、植民第2世代の研究において、変わらずに植民第1世代との違いが言及されているように思われる。これらの研究の大部分は、文化および文学の領域で行われているが、この点について問題提起せずにはいられない。

先に言及したように、1970年代を前後した時期、敗戦以後固着化した植民地支配の忘却と封印、そして過去を反省しない日本社会に警鐘を鳴らす一方、この間隠されてきた自らのアイデンティティを探すための過程で、在朝日本人としての植民地経験を少しずつ話し始めた世代が植民第2世代であるといえることができる。この人々は基本的に植民地朝鮮で生まれるかあるいは育つかし、敗戦によって日本に帰還した後、日本において日本で生まれ育った日本人とは違った背景を持った経験を通して、自らの揺れるアイデンティティを認識し始めたという²⁵。敗戦以後、忘却のメカニズムの中で浮遊したこの人々は、1970年代を前後して自分たちの話を様々な方法で明かし始めた。そのなかで出版された体験記、手記、小説、そしてインタビューを土台に植民第2世代に対する研究が21世紀に蓄積され始めたのである。

そのなかで植民第2世代に対する総合的で体系的な研究成果は、ニコール（Nicole Leah Cohen）である。ニコールはこの研究で1940年代植民地朝鮮、そのなかでも京城の在朝日本人上流階層で育った

「京城子」を「帝国の子どもたち」と命名し、その境界的アイデンティティと文化的ハイブリッド性を通して、脱民族主義的な価値を確認している²⁶。そのほか、文化・文学界においては、植民第2世代の作家たちの作品分析を通して、植民第2世代の境界者的位置とナショナリズム批判がテーゼとなっている²⁷。

これらの研究で植民第1世代と第2世代が区分される第一の理由は、故郷が異なっているという点である。すなわち、1876年の開港以後、朝鮮に移住した植民第1世代は韓国を家であるとみなさなかつただけでなく、常に韓国は一時的な居住地であり、帰るところを念頭に置いていた。その反面、植民第2世代は、植民地朝鮮で生まれ育つたため、親世代のように日本が故郷であるわけがなく、むしろ朝鮮が故郷となり、帰る祖国もない日本と朝鮮に挟まった世代として存在するしかなかった。さらに、植民第1世代は植民地に居住しながらも持続的に「本土日本人」になろうと努力し、よって、そのように考え朝鮮人の前に君臨する「帝国意識」のなかで生き、子どもたちにも「日本人らしさ」を教育し続けた。その半面植民第2世代は、そのような教育を受けつつも、「ほぼ似て」はいたが「完全に一致してはいない」位置にあり、そのため第2世代たちは「半日本人、半朝鮮人」という境界的な人生を生きるしかなかったのである。

ところがこのような世代区分論は、まず植民第2世代が、自身が生まれた朝鮮を懐かしみ、日本人たちが植民地でおかした植民支配の実像を反省しようがしまいが、また単純に生まれ故郷を懐かしむにせよ、事後的なことがすべてであった。すなわち、帝国と植民地の境界者的な人生や「半日本人、半朝鮮人」という認識は、植民地朝鮮の日本人として感じ抱いていた思いと認識ではなく、敗戦を通して日本に帰国し定着しながら、感じ持った複合的な感情である²⁸。もちろん植民第2世代の研究で指摘したように、社会主義との出会いであれ苦痛を受ける在日朝鮮人との出会いを通してであれ、戦後反省なく記憶を封印し忘却する日本の過去認識を問題視し、自らが植民者として日本人とは違うアイデンティティを持っていると感じる感情と認識が、戦後各々の国家に蔓延するナショナリズムによって過去を一つの方向からのみ捉える視点を、解体することができる脱民族的でトランスナショナルな視線となりうる。そしてその姿勢は、依然として注目に値する肯定的な態度である。しかしそうとはいえ、このような認

識が植民第1世代と植民第2世代を区分できる事実に根拠ではないと考える。

むしろ世代区分を、前述のとおり朝鮮に移住した時期的な違いとあわせて、地域別、階層別、ジェンダー別にさらに細密に区分して、多様な在朝日本人像を確認し、これを構築していくことが歴史にさらに符合することではないだろうか。その上、植民第1世代はもちろん生まれ故郷が日本であるため、帰る祖国があったということができる。しかし、自身の人生の場として朝鮮に根をはり、「帝国意識」の中にあっても「朝鮮本位」または「地域本位」、例えば「京城意識」または「釜山意識」を前面に主張しつつ生きていった²⁹。植民第1世代は、生きて帰る故郷を日本に置いてはいたが、死んでも自分たちが作り上げてきた朝鮮に居座りたかつたであろう。特に朝鮮で成功した在朝日本人たちは、余計そうであった。敗戦となったとき、自らが作り上げ集めた農場と財産を朝鮮に置いていけず、韓国人に帰化しようとした群山の日本人地主、嶋谷八十八の逸話は象徴的である。さらに、植民第1世代が故郷に帰ることを考えつつ朝鮮に住んだとするならば、日本人居住地ごとに造成された墓地はどのような意味であろうか。むしろ植民第1世代たちは、朝鮮に渡り、ここに骨を埋める覚悟だったのではないだろうか³⁰。一般的に在朝日本人上層部の人物たちも朝鮮で死ぬと、居住していた朝鮮の居住地と日本の故郷でそれぞれ葬儀を行ったが、結局は朝鮮で葬られる場合が多かつた。そうであるならば、単純に第1世代と第2世代を、生まれた故郷と祖国で区分することはできないだろう。

さらに植民第2世代は、むしろ「日本人らしさ」または「本土日本人」になるための教育と活動の先頭に立った。第2世代たちは本国と同じ共同体を形成し、同一の余暇の大部分と消費を追い求め、日本スタイルの家に住み、神社や寺に参拝したり日本商店でショッピングをしたり、他の日本人たちとクラブや近隣の団体を通してつながっていった。もちろん、この人々は日本の様々な地域にルーツを持つ人々が混ざっており、朝鮮という風土的属性も帯びていたので、折衷的な文化を醸し出しもしたが、これもまた日本文化であると考えつつ生きていた。また他の植民第2世代の研究で言及されたように、植民第2世代の中で成人として朝鮮で活躍したり、朝鮮と日本の文壇に登壇したりした人々は、自ら内鮮一体の先鋒として活動したことは周知の事実である³¹。このような人々と敗戦後に日本で登壇した作

家たちは、登壇の違いと戦後の朝鮮に対する認識の違いがあるだけで、世代としては区分されない。さらに植民第2世代として、「帝国の娘」となったアサノシゲノをみると、この人々は徹底的に日本人を、そして「帝国の娘」という役割を完遂するために悪戦苦闘したことがわかる³²。

そうであるなら、在朝日本人たちの多様な姿とアイデンティティは、世代で区分するのではなく、すでに言及した通り朝鮮に渡ってきた時期的な違い、生まれの違い、階層的な違い、地域的な違い、ジェンダーの違いなど、多様な分野での研究が蓄積されたのちに、これらの違いを通してアイデンティティを立体的に確認することが必要であろう。よって、在朝日本人研究は、より多様な群像を発掘することが喫緊の課題であるといえる。

3. 「境界人」もしくは「植民地民」としての

在朝日本人問題

最後に、はたして在朝日本人たちは、「全員」を植民者として把握することが妥当なのかという問題を考えることとする。在朝日本人たちを「植民者」または「侵略者」、そして「草の根」の支配者として捉える先行研究に対して、植民者としての多様性と多面性を見逃しており、このようなアイデンティティの中で、階級・階層的、ジェンダー的、地域的、世代的な違いが無視されているだけでなく、朝鮮総督府と朝鮮人の間における「境界人」としての位置も見過ごしているという指摘は、すでに提起された³³。このような問題提起は、その後在朝日本人研究の中心的な研究課題になったこともまた事実である。

在朝日本人は、植民権力の一部であったが、一方で朝鮮人と「同一に」朝鮮総督府の直接的な統治対象でもあった。特に戦時体制以前の時期までにおいて、朝鮮総督府が主導した朝鮮人同化政策は、朝鮮人を日本人に「同化」させる重大な「責任」を在朝日本人たちに負わせていた。このため在朝日本人は、植民地民である朝鮮人を先導しなければならない植民者として、植民権力の一部であった。しかし、戦時体制期に入り「皇民化運動」が本格化すると、朝鮮総督府は同化政策実行の主体を朝鮮人と見做し、在朝日本人たちには「皇民となる」義務も課された³⁴。よって在朝日本人たちは、朝鮮人たちと競争的に「戦時体制との協力」と「内鮮一体」義務を強調されるほかなかったのである³⁵。

そのように考えると、現在まだ研究の不足により

断言することはできないが、日中戦争以後、在朝日本人たちも本格的に植民者と植民地民のあいだで浮遊するしかない位置に置かれていたのではないだろうか。このとき植民地の上下関係は、内鮮一体の強制と強要により、人種的・民族的な差別の姿に加えて、階級・階層的、ジェンダー的な差別も頻繁に現れたといえることができる。それ以前の時期にはこれとは反対に、階級・階層的、ジェンダー的上下関係は影をひそめ、人種・民族的な上下関係が前面に現れていた。

まず、階級・階層的な上下関係のなかで下層の在朝日本人たちは、日本人社会内部の上下関係によって、日本人と朝鮮人のあいだに挟まれた境界人としての人生を生きるしかなかった。興南朝鮮窒素肥料工場の場合、日本人社宅の階層による違いにも加わることでできない日雇い労働者のように、職級が低かったり結婚していなかったりする者は、別の住居空間で生活しなければならなかった。このため、このような人々はしばしば近所の朝鮮人の家を間借りして暮らしたり労働運動に参加したりして、日本人たちから不穏視され、ときには日本人の社宅で間借りをしている者は家庭不和事件の犯人として疑われるなど、「日本人だけの安定した社会」ではなく、朝鮮人との関係の中で生きていった。

しかし、境界はいつも選択を伴った。大部分といてもいいほど、階級・階層的上下関係の末端にいた下層の日本人たちは、いわゆる「日本人らしさ」という民族的位階を通して、日本人の境界の中で留まろうと自らを規制し、保守化していった³⁶。ところでこのような下層日本人の境界外との関係づくりが、再び境界の中への回帰として保守化することは、通訳と疎通の問題というよりは、視線と心理の問題であろう。しかし、視線と心理を克服し、境界外の朝鮮人との出会いを選択した在朝日本人も、数は少なかったが存在した。

朝鮮人と「共に」、あるいは植民者ではない植民地民の生を生きようとした在朝日本人として発掘された人物はそれほど多くなかった。現在把握できる人々は、大部分が朝鮮人と共に民族解放運動に奔走した人々であり、すべて朝鮮人と共に反帝国主義運動で検挙された総勢19名ほどが確認されているという。その中で研究された人物は、上甲米太郎と磯谷季次ぐらいである。上甲の場合、教師としてはじめは植民者的な考えが強かったが、朝鮮人の隣人と教え子との関係の中で、朝鮮農村の現実を直視し、その原因を自身と同じ在朝日本人の民族的差別に起因

するものであると考え、朝鮮人との連帯のために反帝国主義教育労働運動を展開するなかで検挙された³⁷。磯谷は興南朝鮮窒素肥料工場で働きながら、朝鮮人の家に下宿し、家主を訪ねてやってくる人たちの集まりを通して、近所の商店で働く朝鮮人たちと知り合った。ここで磯谷は、植民地の不当な民族差別と階級闘争の必要性を学び、「第2次太平洋労働組合運動」に参加して治安維持法違反で検挙された³⁸。彼らは境界人として、境界の外の朝鮮人を直視し、その者たちが置かれた立場を心から感じ、それを通して自らも植民地民として生きていこうとしたということができる。

一方、在朝日本人の女性たちは二種類の集団に分けることができるが、初期の女性たちである、からゆきさんをはじめとした花柳界の女性たちは、共同体の「秩序」維持と、帝国の膨張のために不可欠な「サービス」を提供する人々であった。この女性たちは、日本人植民者社会の周辺人として、「楽な金稼ぎに汲々とし」「下落した」存在として表象されたため、帝国の構成員の人生を問う重要な変数要素として、民族だけでなくジェンダーもやはり重要な変数要素であったことを示してくれているといえる³⁹。

そしてもう一つの部類の女性たちは、女性的道徳を涵養するために尽くさねばならなかった「普通」の女性たちであった。特にこの普通の女性たちは、植民支配の「主体」というよりは、統制と規律の対象であり、その役割においても公的領域から分離した家庭内における役割として、制限を受けたといえる⁴⁰。帝国の家父長制の中で、女性は日本人らしさと良妻賢母、そして健康な母（健母）であらねばなかった⁴¹。もちろんこの役割に忠実な場合、植民者として多様な特権と機会を享受でき⁴²、能動的な男性植民者と共に下からの植民地経営に積極的に参与することで、その活動が本国の女性よりも活発であった者たちも⁴³存在した。しかし大部分は依然として帝国の家父長制の下で、統治対象の位置にいたということができる。

第4章 在朝日本人研究の今後の課題

ここまで、在朝日本人の存在形態と特徴を解き明かし、これを土台に既存の在朝日本人に関する研究動向を三方向から争点化した。この章では、争点化された内容を基礎に今後の研究課題を提示することで、本論文をまとめようと思う。

まず、在朝日本人研究の進展のためには、一時的ではあるが大きなフレームの範疇を設定する必要がある。単純に朝鮮に居住した日本人全てを在朝日本人であるとしてしまうと、その実像と特徴を把握し概念化することが難しいだけでなく、在朝日本人社会自体を構造化することも難しいだろう。よって、基本的に植民地との関係性の中で範疇を設定することが必要である。すなわち、単純な赴任地、訪問地、旅行地として、そしてしばしの居住地として植民地朝鮮を通り過ぎていった人たちすべてを包含するのではなく、朝鮮を自らの人生の場として認識する態度を持った日本人たちを在朝日本人として範疇化するということである。このとき自治意識としての「朝鮮主義」と、定住意識としての「地域主義」は、在朝日本人の性格をよく現しているといえる⁴⁴。

さらに、このような「朝鮮主義」と「地域主義」は、単純に人生の営まれる場所だけを意味するのではなく、植民支配または植民統治とも深い関連性を持っていた。在朝日本人は、これを通して植民権力と植民政策などに深く介入しようとし、多様な組織と自治機関に加担し、新聞と各種市民大会を開き、世論をつくりあげもした。これは植民支配と植民統治をめぐる植民権力と植民政策を研究する政治史領域が、単純に中央の次元でのみ留まることができず、地域の次元にまで拡大されねばならない点をよく示している。よって、まず1つ目に今後在朝日本人たちが積極的に関与した各種の社会・経済・文化組織と団体、自治機関などと、言論、市民大会などに関する研究が必要であるといえる。

2つ目に、争点化した世代論の限界を克服するためには、すでに言及したように、移住時期と存在形態に対する区分を通して、多角度の在朝日本人研究が必要である。在朝日本人自らが併合以前の渡来者と新渡来者を区分するほど、移住集団間の違いは明らかであった。そしてまた、併合とともに以前とは違う大量移住が発生するのだが、このように移住の違いと関連した在朝日本人たちの構成は区分する必要がある。一方、日本の出生と朝鮮の出生の出身地別の違いも存在し、年齢帯別の違いも存在した。よって、全時期を第1・第2世代の世代区分で単純化するのではなく、移住時期別の区分と出身地別の区分、そして年齢帯別区分など、多様な側面から立体化する必要がある。

3つ目に、地域性の発現による地域的区分も重要である。開港初期、主に開港場と開市場で、植民地期の主な交通の要衝地と新興工業地などに在朝日本

人たちが集住するなど、地域的特性による存在形態の違いもある。もちろん既存研究史の整理から、このすべての空間が都市であるため、都市中心の研究だけではなく農村に居住した在朝日本人研究へと拡張せねばならないと述べた。しかし、大部分の在朝日本人たちは都市地域に分布したため、都市の空間的な違いにも注目した研究も蓄積されねばならない。農山漁村に居住した在朝日本人研究も必要であるが、これは主に、移住漁村、移住農村、そして鉱山の場合のように、集住が可能な地域に対しては研究されねばならない。さらに、農山漁村研究に関連して強調したいことは、どの農山漁村であれ、必ず1つは存在した駐在所と学校の、巡査と教師に対する研究だ。都市以外の地域の在朝日本人研究に必ず必要な点であるだろう⁴⁵。

4つ目に、在朝日本人の活動領域が多様であったため、これに対する多層的な研究も必要である。現在まで、個別的な研究が、政治、経済、社会、文化、言論などの分野で進んでいるが、その全体像を確認するには依然として微弱である。比較的多くの研究が存在している地域の有力者に関しては、地主と資本家に限られており、これさえも一部の地域、一部の時期、一部の業種に偏っている。地域、時期、業種の拡大が必要である。

さらに、各種会社・組合と、機関、団体に対する研究だけでなく、多様な分野の人物たちに対する研究も蓄積されねばならない。特に言論の分野は、在朝日本人社会の動向を確認することのできる重要な領域であるにも関わらず、まだまだ始まりの段階に留まっている⁴⁶。その上、政治史分野の官僚と関連し、植民地朝鮮の土着官僚（生え抜き官僚）たちは、植民者としての在朝日本人研究において重要な研究領域である⁴⁷。当然ながら、植民支配と植民統治の政策的パイプであるため、この人々に関する研究は必ず必要である。

5つ目に、階級・階層・ジェンダーの違いによる研究も必要である。最近、在朝日本人下層階級に対する研究は、示唆的なものが多い。この人々は「境界人」として浮遊する位置にただけでなく、選択が強要される時、自発的に保守化する傾向まで帯びた。その半面、朝鮮人との連帯を通して、植民地民としても位置付いたため、もう少し多様な下層階級に関する研究が求められる。

加えて、ジェンダー的観点の在朝日本人研究も必要である。既存の研究が、文学分野の象徴研究に集中したというならば、最近は人類学的な基盤の上で、

在朝日本人女性に関する研究が蓄積されている。今後は、単純にジェンダー的な上下関係だけを確認することに留まるのではなく、違う階級、階層的上下関係と民族的上下関係との相互交差による複雑な様相を解き明かす研究にまで拡張する必要があるだろう。

6つ目に、朝鮮人との接触、連帯等の関係性を無視することなく生きた、いわゆる「善きサマリア人」たちに関する研究も必要である。脱植民の課題は日帝時期だけに限定されない。解放に加え、政治的な脱植民を経験はしたが、依然として経済的・文化的植民化の磁場にいることも事実である。とするならば、政治的植民化を越えて、経済的・文化的植民化をもまた抜け出すことのできる道は、本当の意味で植民地民との関係を無視することのない人生であるといえる。そのような意味で、脱植民地化の一過程でこのような関係性を回復することも重要であり、これについての大切な経験的資産である朝鮮人との関係を通して、植民者から植民地民に「なる」という、在朝日本人研究は明らかに価値のある研究である。

最後に、以上の様な今後の研究は、単に植民地朝鮮にだけ限定されてはいけない。帝国日本の植民地は東アジア全地域に広がっていたのであり、植民地に居住した日本人は、朝鮮はもちろん、台湾、中国（満州）、東南アジア、南洋諸島など、他の地域にも存在した。このような他の植民地の日本人たちと互いに比較すると、在朝日本人の特徴をより具体的に明らかにすることができる土台となるであろう。加えて、西欧の植民地であった場所の人々との相互比較も、20世紀前半の帝国主義の姿と、植民地－帝国体系の普遍史的な位置を推し量ることのできる、よい機会になるはずである。

¹ イ・ヒョンシク（이형식）「在朝日本人研究の現況と課題（재조일본인 연구의 현황과 과제）」『日本学（일본학）』37号（ソウル：東國大学校日本學研究所、2013）；イ・ギョス（이규수）『開港場仁川と在朝日本人（개항장 인천과 재조일본인）』（ソウル：ポゴ社、2015）、第1章 在朝日本人研究の現況と課題（재조일본인 연구의 현황과 과제）参照

² 藤原てい『流れる星は生きている』（東京：中公文庫、1949）；清岡卓行『アカシヤの大連』（東京：講談社文庫、1973）

³ 梶山季之『李朝残影』（東京：文藝春秋新社、1963）；小林勝『チョッパリ 小林勝小説集』（東京：三省堂、1970）；小林勝『朝鮮・明治五十二年』（東京：新興書房、

- 1971); 森崎和江『ははのくにとの幻想婚』(東京: 現代思潮社、1970); 後藤明生「父への手紙」『群像』37号(東京: 講談社、1972)
- 4 日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』(東京: アテネ社、2008年) 第1章 帝国主義論と植民地研究 参照
- 5 村松武司『朝鮮植民者』(東京: 三省堂、1972)
- 6 梶村秀樹「植民地と日本人」『日本生活文化史8-生活の中の国家』(東京: 河出書房新社、1974); 『朝鮮史と日本人』(東京: 明石書店、1992)
- 7 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』(東京: 岩波書店、2000); イ・ギュス訳(이규수訳)『植民地朝鮮の日本人(식민지 조선의 일본인들)』(ソウル: 歴史批評社、2006); 在朝日本人ではないが大連の日本人と日本人社会に関する本格的な研究である柳沢遊の研究[柳沢遊『日本人の植民地経験—大連日本人商工業者の歴史』(東京: 青木書店、1999)]も注目される。柳沢は大連にいた日本人の植民主義的侵略性を明らかにしつつ、存在論的側面から大連の日本人が「帝国のアキレス腱」であると主張している。
- 8 イ・ヒョンシク(이형식)、前掲p.248
- 9 駒込武「[「帝国史」研究の射程]『日本史研究』第452号、p.224(京都: 日本史研究会、2000); 日本植民地研究会編、前掲、第2章ポストコロニアリズムと帝国史研究 参照
- 10 木村健二『在朝日本人の社会史』(東京: 未来社、1989)
- 11 蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』(東京: 不二出版、2008)
- 12 チョン・ソンヒョン(전성현)「日帝下朝鮮商業会議所連合会の産業開発戦略と政治活動(일제하 조선상업회의소연합회의 산업개발전략과 정치활동)」(釜山: 東亜大学校博士学位論文、2006); チョン・ソンヒョン(전성현)『日帝時期朝鮮商業会議所研究(일제시기 조선상업회의소 연구)』(ソウル: ソニン、2011)
- 13 キ・ユジョン(기유정)「日本人植民社会の政治活動と「朝鮮主義」に関する研究—1936年以前を中心に—(일본인 식민사회의 정치활동과 '조선주의' 에 관한 연구—1936년 이전을 중심으로—)」(ソウル: ソウル大学校博士学位論文、2011)
- 14 内田じゅん「Brokers of Empire: Japanese Settler Colonialism in Korea 1910-1937」(Cambridge: Harvard University, 2005); Jun Uchida, 『Brokers of Empire: Japanese Settler Colonialism in Korea, 1876-1945』(Cambridge: Harvard University Press, 2011)
- 15 イ・スンヨブ(李昇燁)「植民地の「政治空間」と朝鮮在住日本人社会」(京都: 京都大学博士論文、2007)
- 16 イ・スンヨブ(李昇燁)、前掲、pp.113~114
- 17 イ・ヒョンシク(이형식)、前掲p.271
- 18 ホ・ヨンナン(허영란)「日帝時期 邑・面協議会と地域政治—1931年 邑・面制実施を中心に(일제시기 읍·면협의회와 지역정치—1931년 읍·면제 실시를 중심으로)』『歴史問題研究』31号(ソウル: 歴史問題研究所、2014); チョン・ソンヒョン(전성현)「日帝時期の道評議会と地域—慶尚南道評議会を通して見た地域の位階関係と地域政治—(일제시기 도평의회와 지역—경상남도평의회를 통해 본 지역의 위계관계와 지역정치—)」『韓日民族問題研究』第27号(ソウル: 韓日民族問題学会、2014)
- 19 イ・ヒョンシク(이형식)「1910年代 日本帝国議会の衆議院と朝鮮統治(1910년대 일본제국의회 중의원과 조선통치)」『史叢』第82号(ソウル: 高麗大学校歴史研究所、2014)
- 20 チョン・ソンヒョン(전성현)、前掲、pp.66~78
- 21 現在のところ学校組合に関する研究は、学校組合が運営する学校と関連する論文が出ている状態であり[チョ・ミウン(조미은)「日帝強占期における在朝鮮日本人学校と学校組合の研究(일제강점기 재조선 일본인 학교와 학교조합연구)」(ソウル: 成均館大学校 博士学位論文、2010)] 学校組合員の教育政策への介入を知ることのできる会議過程と内容に関してはまだ研究がきちんと成されていない。しかし、市街地の建設に学校組合がどのように対応していったのかという事例研究が出されており[リュウ・ナレ(류나래)「軍港都市鎮海の建設と日本人社会の動向: 1911-1917「鎮海学校組合」を中心に(군항도시 진해 건설과 일본인 사회의 동향: (1911-1917) '진해학교조합' 을 중심으로)』(釜山: 韓国海洋大学校 修士学位論文、2014)] 教育政策と関連して地方教育会関連の研究が蓄積しているが、この研究によると1910年まで朝鮮総督府が教員と地域の有志たちによる教育会をきちんと統制できなかつたと明らかにし、在朝日本人たちの教育政策への関与を確認することができる。[仲林裕員(나카바야시 히로카즈)「1910年代における朝鮮総督府の教育政策と在朝日本人教員の統制: 朝鮮教育(研究)会を中心に(1910년대 조선총독부의 교육정책과 재조일본인 교원 통제: 조선교육(연구)회를 중심으로)』『東方学誌』第157号(ソウル: 延世大学校国学研究院、2012)]
- 22 ハン・サング(한상구)「日帝時期「市民大会」の展開様相と性格(일제시기 '시민대회' 의 전개양상과 성격)『第43回全国歴史学大会発表文(제43회 전국역사학대회 발표문)』(2000); キム・ギョンニム(김경림)「1920年代電氣事業府営化運動—平壤電氣府営化を中心に—(1920

- 년대 전기사업 부영화운동 - 평양 전기 부영화를 중심으로 -」『白山學報』第43号 (ソウル:白山学会、1996); 김·젠히 (김제정) 「1930년대 初盤京城地域電氣事業府營化運動 (1930년대 초반 경성지역 전기사업 부영화 운동)」『韓國史論』第43号 (ソウル:ソウル大学校国史学科、2000); 오·진석 (오진석) 「1930년대はじめ電力産業公營化運動と京城電氣 (1930년대 초 전력산업 공영화 운동과 경성전기)」『史學研究』第94号 (果川:韓國史学会、2009); 김·스 (김승) 「1920년대 釜山の電氣府營運動とその意味 (1920년대 부산의 전기부영운동과 그 의미)」『地域と歴史』第32号 (釜山:釜慶歴史研究所、2013)
- ²³ 長沢一恵 「朝鮮總督府・鉦務官僚と朝鮮鉦業會 - 兩大戰間期における鉦業保護獎勵策を中心に -」『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(京都:思文閣出版、2009)
- ²⁴ 혼·스콘 (홍순권) 『近代都市と地方權力 (근대도시와 지방권력)』(ソウル:ソニン、2010); 京城の場合では、カン·ピョンシク (강병식) 「日帝下京城府設置と府協議會に対する小考 (일제하 경성부 설치와 부협의회에 대한 소고)」『東西史學』(2009); 키·유진 (기유정) 「1920年代京城の「有力者政治」と京城府協議會 (1920년대 경성의 ‘유지정치’ 와 경성부협의회)」『ソウル學研究』第28号 (ソウル:ソウル市立大学校ソウル學研究所、2007); ヨム·ボッキュ (염복규) 「日帝下都市地域政治の構図と様相: 1920年代京城市区改修移管と収益税制定論争の事例分析 (일제하 도시지역정치 의 구조와 양상: 1920년대 경성 시구개수 이관과 수익세 제정 논란의 사례분석)」『韓國民族運動史研究』第67号 (ソウル:韓國民族運動史学会、2011); 김·돈미 (김동명) 「植民地朝鮮における府協議會の政治的展開 (식민지 조선에서의 부협의회의 정치적 전개)」『韓日關係史研究』第43号 (ソウル:韓日關係史学会、2012); ヨム·보키 (염복규) 「植民地期の都市問題をめぐる葛藤と「民族的対立の政治」(식민지시기 도시문제를 둘러싼 갈등과 ‘민족적 대립의 정치’)」『歴史と現実』第88号 (ソウル:韓國歴史研究会、2013); チョン·ヨンウク (전영욱) 「日帝期京城の「公設質屋」設置 (일제시기 경성의 ‘공설질옥’ 설치)」『ソウル學研究』第54号 (ソウル:ソウル市立大学校ソウル學研究所、2014)。釜山に関する代表的なものとしては、ホン·スコン (홍순권) ほか『釜山の都市形成と日本人たち (부산의 도시형성과 일본인들)』(ソウル:ソニン、2008); 혼·스콘 (홍순권) ほか『日帝強占下釜山の地域開発と都市文化 (일제강점하 부산의 지역개발과 도시문화)』(ソウル:ソニン、2009); 김·스 (김승) 『近代釜山の日本人社會と文化変容 (근대 부산의 일본인사회와 문화변용)』(ソウル:ソニン、2014)。仁川の場合、イ·ギユス (이규수) 『開港場仁川と在朝日本人 (개항장 인천과 재조일본인)』(ソウル:ポゴ社、2015); ムン·ヨンジュ (문영주) 「20世紀前半期の仁川地域經濟と植民地の近代性 - 仁川商業會議所 (1916~1929) と在朝日本人 (20세기 전반기 인천 지역경제와 식민지 근대성 - 인천상업회의소 (1916~1929) 와 재조일본인)』『仁川學研究』第10号 (仁川:仁川大学校仁川學研究院、2009)。このほか、イ·ジュンシク (이준식) 「日帝強占期における群山での有力者集團の推移と活動 (일제강점기 군산에서의 유력자집단의 추이와 활동)」『東方學誌』第131号 (ソウル:延世大学校国学研究院、2005); ソン·ギュジン (송규진) 「日帝強占初期における「植民都市」大田の形成過程に関する研究: 日本人の活動を中心に (일제강점 초기 ‘식민도시’ 대전의 형성과정에 관한 연구: 일본인의 활동을 중심으로)」『亜細亞研究』第45号 (ソウル:高麗大学校亜細亞問題研究所、2002); ソン·ギュジン (송규진) 「日帝強占期における「植民都市」清津發展の実像 (일제강점기 ‘식민도시’ 청진 발전의 실상)」『史學研究』第110号 (果川:韓國史学会、2013); 김·비진 (김희진) 「日帝強占期における大邱商業會議所の構成と請願運動 (일제강점기 대구상업회의소의 구성과 청원운동)」(ソウル:ソウル大学校修士學位論文、2014); 김·일수 (김일수) 「[日韓併合] 以前の大邱における日本人居留民團と植民都市化 (‘한일병합’ 이전 대구의 일본인 거류민단과 식민도시화)」『韓國學論集』第59号 (大邱:啓明大学校韓國學研究院、2015)
- ²⁵ 코·길희 (고길희) 『旗田巍: 馬山で生まれた日本人朝鮮史學者 (하타다 다카시: 마산에서 태어난 일본인 조선사학자)』(ソウル:知識産業社、2005)
- ²⁶ Nicole Leah Cohen 「Children of Empire: Growing up Japanese in Colonial Korea, 1876-1946」(New York: Columbia University, 2006)
- ²⁷ 이·우온희 (이원희) 「梶山季之と朝鮮 (가지야마 도시유키와 조선)」『日本語文學』第38号 (大邱:日本語文學會、2007); チェ·ジュン호 (최준호) 「小林勝の植民地朝鮮認識 (고바야시 마사루의 식민지 조선 인식)」第48号『日本語文學』(順天:韓國日本語文學會、2011); 原佑介 (하라 유스케) 「懐かしさを禁じるということ - 朝鮮植民者2世作家小林勝と朝鮮に対する郷愁 (그리움을 금하는 것 - 조선식민자 2세 작가 고바야시 마사루와 조선에 대한 향수)」『日本研究』第15号 (ソウル:高麗大学校日本研究センター、2011); 신·스모 (신승모) 「[戰後] 日本社會と植民者2世文學の登場 - 梶山季之文學を中心に - (‘전후’ 일본사회와 식민자2세 문학의 등장 - 가지야마 도시유키 문학을 중심으로 -)」

- 『日本学』第34号(ソウル:東国大学校日本学研究所、2012);キム・ギョンヨン(김경연)「解放/敗戦以後の韓日帰還者の叙事と記憶の政治学(해방/패전 이후 한일 귀환자의 서사와 기억의 정치학)」『私たちの文学研究』第38号(天安:私たちの文学会、2013);シン・スンモ(신승모)「植民者2世の文学と朝鮮-小林勝と後藤明生の文学を中心に-(식민자 2세의 문학과 조선 -고바야시 마사루와 고토 메이세이의 문학을 중심으로-)」『日本学』第37号(ソウル:東国大学校日本学研究所、2013);イスヨル(이수열)「在朝日本人2世の植民地経験-植民2世出身作家を中心に(재조일본인2세의 식민지 경험 -식민2세 출신 작가를 중심으로)」『韓國民族文化』第50号(釜山:釜山大学校韓國民族文化研究所、2014)
- ²⁸ 植民第1世代との差を感じ、歪んだ韓国觀打破に力を注いだ馬山出生の韓国史学者旗田巍も「支配者である日本人と被支配者である韓国人の関係を「自然な現象」として受け入れ、植民者としての自身がどのような存在であるか考えてみる余裕」を敗戦前までは感じることができなかった。[다테노 아키라(館野哲)『そのとき、その日本人たち(그때 그 일본인들)』(坡州:한길사、2006) pp.387~393] もちろん、植民者という名称を付与し、過去の反省を促した村松武司(村松武司、前掲、参照)〈チョッパリ(쪽말이)〉を通して侵略者としての自己嫌悪を感じた小林勝も第2次世界大戦当時、陸軍予科士官学校と陸軍航空士官学校に入学し、小さなノートに合格の喜びと敵国に対する強い敵愾心を持つ「皇国青年」にほかならず(チェ・ジュンホ(최준호)、前掲、pp.141~142)「戦後になってようやく、我が国が過去朝鮮にどのようなことを犯してきたのか、知ることになった」と明かしている。(キム・ギョンヨン(김경연)、前掲、p.298)
- ²⁹ パク・クァンヒョン(박광현)「在朝日本人の在京城意識と京城表象(재조일본인의 '재경성 의식' 과 '경성' 표상)」『尚虚学報』第29号(ソウル:尚虚学会、2010);타무라 히데아키(田村栄章)「在朝日本人の朝鮮・都市としての「京城」(재조일본인의 조선·도시로서의 '경성')」『韓國現代文学会 學術発表會資料集』第3号(ソウル:韓國現代文学会、2009);京城と同じく釜山の場合、「大釜山建設」を主張し、大阪、大連、ウラジオストク、サンフランシスコ等と比較する「釜山意識」を在朝日本人社会は共有していたとすることができる。
- ³⁰ これまで進められている在朝日本人の死に関連した研究では、日本人たちの葬送方法である化粧が1920年代まで故郷への回帰と関連があるとみなされてきた。しかし、1930年を前後する時期に、ほとんどの大都市では近代式設備の化粧場と葬儀式場、そして日本人共同墓地の公園化が進められるなど、死までもが朝鮮に定着しようとする政策と意識が拡張されたものとしてみることができる。[リュ・キョヨル(류교열)「1930年代植民地海港都市釜山の日本人社会と「死」のポリティクス(1930년대 식민지 해양도시 부산의 일본인사회와 '죽음' 의 폴리틱스)」『日語日文学』第49号(釜山:大韓日語日文学会、2011)]
- ³¹ 戦時体制期、緑旗連盟と総力連盟で活動した森田芳夫については、ファン・ソンイク(황선익)「解放前後における在韓日本人の敗戦経験と韓国認識-森田芳夫を中心に(해방 전후 재한일본인의 패전 경험과 한국 인식.모리타 요시오를 중심으로)」『韓國学論叢』第34号(ソウル:国民大学校韓國学研究所、2010);キ・ユジョン(기유정)「日本帝国と帝國的主体のアイデンティティ-『緑旗』・『緑人』の中の森田芳夫の国体論とアイデンティティ分析を中心に-(일본제국과 제국적 주체의 정체성 -『녹기』・『녹인』속 모리타 요시오의 국체론과 정체성 분석을 중심으로-)」『日本学』第35号(ソウル:東国大学校日本学研究所、2012)を参照。植民2世作家として戦前に登壇し、〈カンナニ〉という3・1独立運動を素材にした小説を描きはしたものの、以後「内鮮一体志向型」小説の創作活動を植民地で行い、敗戦後、「戦前に内面化していた植民者的無意識を戦後に「友好親善」へと転移し、朝鮮を懐かしい「故郷」として郷愁する心像が混在」していた湯浅克衛に対しては、パク・クァンヒョン(박광현)「湯浅克衛文学に現れる植民2世の朝鮮(유아사 가쓰에 문학에 나타난 식민2세의 조선)」『日本学報』第61号(ソウル:韓國日本学会、2004);クォン・スンヒョク(권승혁)「内鮮一体志向小説として見た『カンナニ』(내선일체지향소설로 본 『간난이』)」『日本語文学』第32号(大邱:日本語文学会、2006);シン・スンモ(신승모)「『引き揚げ』後の湯浅克衛論-連続する混淆性('인양' 후의 유아사 가쓰에론 -연속해가는 혼효성)」『日語日文学研究』第71号(ソウル:韓國日語日文学会、2009);チョ・ジョンミン(조정민)「湯浅克衛『カンナニ』の政治的アレゴリーを読む(유아사 가쓰에 『간난이』의 정치적 알레고리 읽기)」『韓日民族問題研究』第22号(ソウル:韓日民族問題学会、2012)
- ³² ヘレン・リー(헬렌 리)「帝国の娘として死ぬということ(제국의 딸로서 죽는다는 것)」『亜細亜研究』第51-2号(ソウル:高麗大学校亜細亜問題研究所、2008)
- ³³ 内田じゅん「書評 高崎宗司著『植民地朝鮮の日本人』(『韓國朝鮮の文化と社会2』(東京:風響社、2003)(イ・ヒョンシク(이형식)「在朝日本人研究の現況と課題(재조일본인 연구의 현황과 과제)」p.248から再引用)
- ³⁴ ヘレン・リー(헬렌 리)、前掲p.80

- 35 우치다 준 (内田じゅん) 「総力戦時期における在朝鮮日本人の「内鮮一体」政策に対する協力 (총력전 시기 재조선 일본인의 '내선일체' 정책에 대한 협력)」『亜細亞研究』第51-1号 (ソウル: 高麗大学校亜細亞問題研究所, 2008)
- 36 ヤン・ジヘ (양지혜) 「『植民者社会』の形成: 植民地期下層出身日本人移住者の都市経験と自己規制」(『식민자 사회』의 형성: 식민지기 하층 출신 일본인 이주자의 도시 경험과 자기규제)」『都市研究: 歴史・社会・文化』第7号 (ソウル: 都市史学会, 2012)
- 37 イ・ジュンシク (이준식) 「在朝日本人教師上甲の反帝國主義的教育労働運動 (재조 일본인교사 조코의 반제국주의 교육노동운동)」『韓國民族運動史研究』第49号 (ソウル: 韓國民族運動史学会, 2006); 太田千恵美 「在朝日本人教師上甲米太郎の生涯と活動 (재조 일본인 교사 조코 요네타로의 생애와 활동)」(高麗大学校修士学位論文, 2015)
- 38 ヤン・ジヘ (양지혜) 「『植民者』思想犯と朝鮮 - 磯谷季次再読 (『식민자』 사상범과 조선-이소가야 스에지 다시 읽기)」『歴史批評』第110号 (ソウル: 歴史問題研究所, 2015)
- 39 クォン・スギン (권숙인) 「植民地朝鮮の日本人花柳界女性 - ある芸者女性の生涯史を通して見た周辺部女性植民者 (식민지 조선의 일본인 화류계 여성 - 한 게이샤 여성의 생애사를 통해 본 주변부 여성 식민자)」『社会と歴史』第103号 (ソウル: 韓國社会史学会, 2014); 이·카헤 (이가혜) 「初期在朝日本人社会での在朝日本人遊女の表象 (초기 재조일본인 사회에서의 재조일본인 유녀의 표상)」『人文学研究』第49号 (光州: 朝鮮大学校人文学研究院, 2015)
- 40 クォン・スギン (권숙인), 前掲p156
- 41 ヘレン・リー (헬렌 리), 前掲参照; 김·히오스 (김효순) 「植民地朝鮮での渡韓日本女性の現実 (식민지 조선에서의 도한 일본여성의 현실)」『日本研究』第13号 (ソウル: 高麗大学校日本研究センター, 2010); 김·히오스 (김효순) 「1930年代日本語雑誌の在朝日本人女性表象 (1930년대 일본어잡지의 재조일본인 여성 표상)」『日本文化研究』第45号 (瑞山: 東アジア日本学会, 2013)
- 42 クォン・スギン (권숙인), 前掲p157
- 43 アン・テユン (안태운) 「植民地に來た帝國の女性、在朝鮮日本女性 津田節子を通して見た植民主義とジェンダー (식민지에 온 제국의 여성, 재조선 일본여성 쓰다 세즈코를 통해 본 식민주의와 젠더)」『韓國女性学』第24卷4号 (ソウル: 韓國女性学会, 2008); 윤·ジョン난 (윤정란) 「19世紀末20世紀初めの在朝鮮日本女性のアイデンティティと朝鮮女性教育事業: キリスト教女性淵澤能恵 (1850-1936) を中心に (19세기말 20세기 초 재조선 일본여성의 정체성과 조선여성교육사업: 기독교 여성 후치자와 노에 (1850-1936) 를 중심으로)」『歴史と境界』第73号 (昌原: 釜山慶南史学会, 2009); 오·손스쿠 (오성숙) 「日本女性とナショナリズム - 奥村五百子、愛国婦人会を中心に - (일본여성과 내셔널리즘-오쿠무라 이오코, 애국부인회를 중심으로)」『日語日文学研究』第77号 (ソウル: 韓國日語日文学会, 2011); 야마모토 조호 (山本浄邦) 「大韓帝國期光州における奥村兄妹の眞宗布教・実業学校設立をめぐる (대한제국기 광주에 있어서의 오쿠무라 남매 진종포교·실업학교 설립을 둘러싸고)」『民族文化研究』第57号 (ソウル: 高麗大学校民族文化研究所, 2012); 스가와라 유리 (菅原百合) 「日帝強占期 淵澤能恵 (1850~1936) の朝鮮での活動 (일제강점기 후치자와 노에 (淵澤能恵: 1850~1936) 의 조선에서의 활동)」『日本学』第35号 (ソウル: 東国大学校日本学研究所, 2012)
- 44 「地域主義」に関連しては各種公共財の誘致・移転等はもちろんのこと、「グレート〜」または「大〜建設」等のスローガンを通して大々的な世論操作と運動が全朝鮮で展開された。
- 45 尹健次 「植民地日本人の精神構造 - 「帝國意識」とは何か - 」『思想』第778号 (東京: 岩波書店, 1989) pp.12~13
- 46 チャン・シン (장신) 「日帝初期、在仁川日本人の新聞発行と朝鮮新聞 (일제초 재인천 일본인의 신문 발행과 조선신문)」『仁川学研究』第6号 (仁川: 仁川大学校仁川学研究院, 2007); 李相哲 『朝鮮における日本人経営新聞の歴史 (1981~1945)』(東京: 角川学芸出版, 2009); 혼·스unkon, 차·온·sonhyon (홍순권, 전성현) 『日帝時期 日本人の釜山日報経営 (일제시기 일본인의 부산일보 경영)』(釜山: 世宗出版社, 2013)
- 47 「生え抜き」は、代々その場所で生まれ育った生粋の、または、一つの同じところに勤続することを意味するが、ここでは植民地朝鮮に赴任してから退任するときまで継続的に勤務した土着官僚を意味し、より以前に來た者 (旧來種) と新しく來た者 (新來種) の区分において、旧來種に属する官僚たちであった。[岡本真希子 「朝鮮総督府の高級官僚人事」『植民地官僚の政治史』(東京: 三元社, 2008); 松田利彦 「朝鮮総督府官僚 守屋栄夫と「文化政治」 - 守屋日記を中心に」『日本の朝鮮台湾支配と植民地官僚』(京都: 思文閣出版, 2009)]